

訳者あとがき

本訳書、スタール夫人著『コリーヌ あるいはイタリア』は、訳出にあたりシモーヌ・バレイエによる校訂版 (*Mme de Staël, Corinne ou l'Italie, Edition présentée, établie et annotée par Simone Balayé, Gallimard, collection folio, 1985*) をはじめとして、以下に述べるとおり、今世紀に入って刊行された各種テキストを参照した。

シモーヌ・バレイエがテキストを確立した、このガリマール社フォリオ版は今に至るまで刷を重ねているが、これとは別にバレイエは二〇〇〇年にスタール夫人全集の第一回配本として、『コリーヌ あるいはイタリア』をオノレ・シャンピオン社 (*Honoré Champion*) から刊行した。

また二〇一七年には、カトリオナ・セト (*Cariona Seth*) に

よって「スタール夫人全集」がやはりガリマール社のプレイヤード叢書の一冊として出版されている。その中には、『社会制度との関係において考察した文学について』いわゆる『文学論』 (*De la littérature*)、書簡体小説『デルフィーヌ』 (*Delphine*)、そして『コリーヌ あるいはイタリア』が収められている。

バレイエ校訂フォリオ版同様にこれらの書にも、この小説をめぐる克明な生成過程 (*genesis*) をはじめとして、解説、大量の註釈その他が含まれている。訳者は、近年のこれらの刊行に接したことで、三十年近く前に『コリンナ 美しきイタリアの物語』 (国書刊行会) という表題で刊行した自身の訳書を改めて世に問うことを心に決めた。

スタール夫人について

スタール夫人（一七六一—一八一七）の名は、日本ではあまり知られていない。世界史の授業でフランス革命勃発時の財務総監ジャック・ネッケル（フランス語読みとしてはネツケール）について学んだことはあっても、その愛娘ジェルメーン・ネッケル（後のスタール夫人）について知る人は多くはないだろう。

一七六六年パリに生まれて、母親のシュザンヌ主催のサロンで、幼い時から十八世紀を代表し、歴史にその名をとどめるような人々に接しながら成長した。後に自身が主催するサロンには、ヨーロッパ中からやって来る文人、政客を集めた。

一七八六年、二十歳でパリ駐在スウェーデン大使のスタール男爵と結婚。一七八八年に二十二歳で『ジャン・ジャック・ルソーの著作と性格についての書簡』を刊行している。その後も様々な論考を出版したが、後世に特によく知られているのは、一八〇〇年『文学論』、一八一三年『ドイツ論』（*De l'Allemagne*）である。

一七九五年に「フィクション試論」(*Essai sur les fictions*)を出しているが、実際に書かれた主たる長編小説が、一八〇二年に出された小説『デルフィーヌ』、一八〇七年『コリーヌあるいはイタリア』であった。

財務総監であった父とともに、まさにフランス革命の始まりに直面した。その後、政治状況の進展とともに、自由を求めるゆえに、台頭するナポレオン・ボナパルトとの対立に至り、一八〇三年にはついにパリ滞在禁止令、次いでフランス国外追放令を受ける身となった。父親の出身地であるスイス、レマン湖畔のコペの館に蟄居の身となる。

一八〇四年、夫人はこの地からドイツへ旅に出るのだが、その旅こそが、この小説『コリーヌ あるいはイタリア』の構想を生み出すきっかけとなった。このドイツ旅行中に、父ネッケルの計報によってコペに戻るが、その年の十二月、ジュネーヴからイタリアへ旅立つ。『コリーヌ あるいはイタリア』の構想を実現するための旅であった。

一八一〇年には、出版を目前にして、『ドイツ論』が皇帝ナポレオンによって即時廃棄の命令を受け、夫人はコペとジュネーヴに居住指定を受ける身となった。一八一二年に、ついにコペを脱出する。ウィーン、モスクワ、ペテルブルクを経て、亡夫の故郷であるストックホルムからイギリスへ渡る。ナポレオン凋落の報を得て、一八一四年にパリへ戻った。

この時期に書かれた『追放十年』(*Dix années d'exil*)は未完であるが、ここで訳者が挙げたい著書である。また、一八一七年五十一歳で死去する前年に発表された「翻訳の精神につづつ」(*De l'esprit des traductions*)も。シモーヌ・バレイエは、

ガリマール社フォリオ版『コリーヌ あるいはイタリア』（一九八五年版）の解説において、スタール夫人の生涯を次のように総括している。

スタール夫人は自由検証の精神によつて、自分が継承した啓蒙主義の教育から逸脱したことによつて、あらゆる党派の人々から攻撃された。ジャコバン党員、過激王党派、後には、古典派の古参親衛隊、時としてロマン派に。彼らは夫人の著書によつて育まれたのに。ついには、一八七〇年以後、『ドイツ論』が、独仏戦争に敗れたフランス人の憎しみの的となつたが、今日もお夫人は、論争的、攻撃的言葉でもって語られている。過去の著作はたいへい平穩に取り扱われるものだが、彼女がその恩恵に浴していないのは、おかしなことだ。以前より公平な研究がなされて夫人を次第に正当な位置につかせたのは、ついこの三十年ほどのことである。

訳者としては、ここで次のように付け加えなければならぬ。ここに書かれた三十年というのは、まさにスタール夫人研究者としての、また「スタール夫人研究学会」の会長としての、シモーヌ・バレイエの奮闘の軌跡であることを。

『コリーヌ あるいはイタリア』が生まれるまで冒頭に示したように、『コリーヌ あるいはイタリア』のテクスト確立者シモーヌ・バレイエや、カトリオナ・セトがともに力をこめて、その解説で書き述べているのが、この小説の生成過程である。

フランスにおける十八世紀は、啓蒙思想家が多く活躍した世紀であつたが、文学においては貴族、文学者、芸術家の集つたサロンが確立し、古典主義が乗り越えられようとしていた。社会構造の変化にともない、サロンにも新興勢力であるブルジョワ、啓蒙思想家が集うようになっていた。一七八九年の革命が近づくにつれて、サロンは文芸サロンというよりは、政治、社会をめぐる議論の場、政治クラブのような空間に変容をとげていた。

スタール夫人は、何よりも『ドイツ論』によつて、フランスにロマン主義理論をもたらした人として、後世にその名を残している。その『ドイツ論』執筆へと進む第一歩となるドイツへの旅は、一八〇三年十一月に子どもらを連れて、当時同志にして愛人であつたバンジャマン・コンスタン (Benjamin Constant, 一七六七—一八三〇) とともに出発。ちなみにコンスタンは、小説『アドルフ』の作者であるが、後年フランスの政治家としても活躍した。

十二月にはワイマールに到着、シラー、ゲーテ、ヴィーラン
トに会う。翌年四月に、父ネッケルの訃報を受けて急遽コペに
帰宅するのだが、この初めてのドイツ旅行においては、未だ
『ドイツ論』執筆の明確な意思は持っていなかった。

それどころか、一八〇四年二月にワイマールの劇場で当時大
成功をおさめていた歌劇「ラ・サアルのニンフ（妖精）」を観
劇。その翌日には早速、父親に手紙を書き送っている。「昨日、
素晴らしい想像力と夢幻の演劇を観て、新たな小説の構想を思
いつきました」。そして「このドイツ人というのが独特な国民
です。ごくさりげないのですが、ロマネスクな想像力を持って
いるのです」。

夫人に新しい小説執筆の構想をもたらした、この歌劇「ラ・
サアルのニンフ」は、水の妖精が一人の騎士を愛するが、この
騎士はニンフが不死であること、人間と異なっていることに気
づいて、ただの死すべき存在にすぎない女のために、ニンフを
捨ててしまう。夫人は、ここに優れた女性という主題を見て取
る。また同時に、このテーマを活かす小説舞台として、イタリ
アが思い浮かんだ。

スタール夫人は、イタリアを舞台とした小説の執筆に向けて、
一八〇四年十二月四日に三人の子どもらと、ドイツで知己を得
て、子どもの教育役を依頼していたアウグスト・ヴィルヘル
ム・シュレーゲル (August Wilhelm Schlegel) とともにジュネ

ーヴを出発している。シュレーゲルは、古典主義とロマン主義
について論じた批評家であった。彼らはレマン湖畔ジュネーヴ
からフランスへ下り、モン・スニ峠を越えて（小説の結末近く
で、オズワルドも妻子を連れてこの峠を越えている）イタリア
入りした。コペに戻ったのは、翌年の六月二十四日であった。

これは作家の脳裏に浮かんだばかりの構想を、小説として結
実させるための旅であった。旅行中のスタール夫人は、ローマ
でただ古代ローマに思いを馳せていただけではない。ナポリへ
の旅立ちの時から、登場人物たちがイタリアの地のどこでど
のように行動するかを思い描いている。ナポリに着いた後は、ヴ
ェスヴィオ山に登り、ポンペイ遺跡に足を踏み入れ、小説の中
でコリーヌが即興詩を披歴することになるミゼーノ岬にも出か
けている。

この翌年六月にコペに帰りつくまでの実際の旅程が、バレイ
エによる二〇〇〇年刊行の『コリーヌ あるいはイタリア』の
巻末に記されている。残されたスタール夫人の旅の手帳をもと
に、バレイエが甦らせた足跡である。

訳者は、この旅程を参考にしながら、小説の主人公たちがめ
ぐる土地の名を、イタリア全土の地図で確認した。一九九〇年
に旧友の三須リツ子氏と訪れたローマ、ナポリ、フィレンツェ、
ミラノで見た風景、景観の記憶をたどりながら。

この小説のテーマおよび構造

この小説のテーマおよび構造は単一ではない。登場人物に焦点をあてれば、優れた女性と平凡な女性の間にいる男性というテーマが見られる。この小説執筆が発想されたのが、ワイマールでの観劇に由来するということは、先に述べたとおりである。小説の筋立てとしては、コリーヌとオズワルドの恋物語であることは、間違いない。また、物語の全体を覆っているのは、亡くなった父親による息子オズワルドに対する支配力である。スタール夫人に対する父ネッケルのように。

しかし、全体を見直せば、この恋物語の中には、複数の重要なテーマが重なり合い、いくつもの層が形成されている。

ローマ随一の即興詩人であるコリーヌが、イギリス軍人オズワルドにローマを案内して回る。歴史的建造物は勿論のこと、彫像、絵画、音楽、文学、またイタリア人の暮らし、その気質、信仰生活について語られ、オズワルドとの議論ともなる。スタール夫人は、恋物語を軸として、古代ローマを懐くイタリアそのものを描き出している。イタリア半島の古代から十九世紀初頭に至る歴史と文化、イタリア半島の自然、イタリア半島に住む人々……小説の題名が表わしているように、これはまさしく、『ドイツ論』に先駆けて執筆された「イタリア論」なのである。

ローマから始まるコリーヌとオズワルドの恋の日々は、フランス革命後期の一七九四年から九五五年に設定されている。しかし、夫人がイタリアに入ったのは一八〇四年末であった。つまり、ローマの美術品がナポレオン軍によって略奪、移送される以前の時期が設定されているのである。コリーヌがオズワルドとともに訪れる美術品は、スタール夫人がルーヴル美術館で見ただものであり、小説家の想像力によって、本来あった場所、イタリアの博物館、教会などへと戻されたのである。十九世紀に入ったのナポレオン支配下にあるイタリア半島を描くことは、作家の念頭にはなかったのである。

他に一目瞭然であるテーマは、様々な比較対照が表出されていることであろう。コリーヌの国イタリアとオズワルドのスコットランド。フランス人の典型のように描かれるデルフィユ伯爵。北と南。イタリアのカトリックとイギリスの宗教。

訳者の心に響く、諸芸術についての比較論もあった。コリーヌが絵画を前にして、そのモチーフを語りつつ、演劇と詩と絵画がそれぞれ表現できるもの、できないものについて述べるくだりである。

また、訳者は、ベアトリス・ディディエ著「スタール夫人の『コリーヌ あるいはイタリア』」(Beatrice Didier, *Corinne ou l'Italie de Madame de Staël*, Gallimard, 1999) を読む機会を得たのだが、思いがけない感銘を受けた。ディディエは、この小説

をあらゆる角度から分析しているが、この小説の構成について、三人称で語られる恋の物語が基調であるが、いくつかの文体が共存しているというのである。異なるジャンルの文体を併存させている、という分析がされている。

なるほど、即興詩人であるコリーヌは、カピトリノの丘で、またナポリの田園で、そして最期を迎えるフィレンツェで、聴衆を前にして詩を詠い上げている。他方、ローマで遺跡、諸美術の解説をするコリーヌはオズワルドに語りかけながらも、これはそのまま美術論、芸術論となっており、文体としては論説である。

そして、コリーヌの夜会では、参加者たちの対話が繰り返される。生涯にわたって当代の名士たちと活発な対話を交わした作者スタール夫人のように。また、物語の進展につれて、コリーヌとオズワルドの間には、手紙のやりとりが数回ある。読者はこれらの手紙を読むことによって、一人称で綴られる文体に出合うことになるのである。

旅の物語

訳者はここで改めて、この小説が旅の物語でもあることに触れたい。スタール夫人自身が、その一生を通じて幾度の旅をしたことだろうか。十歳の時に父母に連れられてイギリスを訪れたのを皮切りに、生涯にわたって繰り返されたパリとスイス・

レマン湖畔との往復。追放された身での、ドイツそしてイタリア旅行。そして一八二二年の亡命の旅では、コペから、キエフ（キウ）、モスクワ、ペテルブルクに至るまで大陸を横断の後、ストックホルムを経て、イギリスにたどり着く。

このような作者の人生を映し出すかのように、『コリーヌあるいはイタリア』も、旅また旅の小説である。物語を展開させて行くのは、登場人物それぞれが繰り返す旅なのである。早々とこの小説の第一部で述べられているのは、旅についての、作者自身の感慨そのものであろう。

旅すること、それは何といっても人生における最も寂しい楽しみの一つである。あなたがどこか異国の町でなんとかやって行けたら、あなたはそこを自分の故国と思いはじめているのだ。だが、見知らぬ国々を旅して行き、ほとんど理解できない外国語を耳にし、あなたの過去にも未来にも無縁の人々の顔を見るのは、孤独と孤立の中に身を置くことであり、そこでは安らぎを感じることも、自尊心を覚えることもできない。

一八二二年には、モスクワ、ペテルブルクへ向けて大陸を横断の後、ストックホルムを経て、イギリスにたどり着く。『追放十年』の執筆を開始するのはこの旅の途上においてである。